

# フェローシップ・ニュース

## 51

### アパリフォーラム開催しました！

#### アパリ13年を迎えて

平成24年2月22日、初めてのアパリ・フォーラムを聖イグナチオ教会にて無事開催することができました。おいでいただいた皆様、これまでアパリの活動を応援してくださった支援者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成12年2月に設立されたNPO法人アパリは、わが国の刑事司法手続に薬物依存症治療を義務付ける制度が未整備であることに着目し、薬物問題を抱えた刑事被告人の方に、刑事裁判中に保釈申請して制限住居をダルクや病院に設定して一刻も早い治療につながっていただけるようコーディネートする司法サポート・プログラムを中心に12年間活動してきました。また刑務所からの仮釈放時の帰住地をダルクに設定し、仮釈放の日からダルクに入寮できるよう道筋を設定する司法サポートも現在アパリの活動の大きな柱になっています。

また、8年前に当時アジア極東犯罪防止研修所の教官であられた横地環先生よりお話をいただいてより、フィリピンの薬物依存症者の回復支援を視野に入れた活動をするようになりました。JICAの支援によってアパリによるフィリピンの貧困層に対する薬物依存症者回復支援事業が開始されてから、今年で3年が経過します。

さらに財団法人三菱財団、財団法人日本国際交流センターリーバイ・ストラウス・コミュニティ活動推進基金、社会福祉・医療事業団（当時）、社会福祉法人中央共同募金会、財団法人東京都福祉保健財団から助成金をいただいています。これらの助成金はアパリの日々の活動継続と発展のために大変有難く有意義なものでした。心よりお礼を申し上げます。

アパリがこれまで活動を続けてこられたのも、ひとえにご支援くださった会員、関係機関各位、支援者の皆様のお陰であると心より感謝しております。また、言うまでもなく、ダルクの皆さんのご理解とご協力なくしてアパリの活動は成り立ちませんでした。深く感謝申し上げます。また日頃からお世話になっているアパリ・クリニックの皆さんにも感謝を捧げます。

これからもスタッフ一丸となって精進してまいりますので、どうぞ一層のご支援とご協力を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

事務局長 尾田 真言



特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日  
2012年3月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。  
全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

#### 目次：

アパリ13年を迎えて… 事務局長尾田真言	1
アパリ13周年フォーラム & 報告会 シンポジウムより	2
入寮者からのメッセージ…隆也	6
国際シンポジウム沖縄のお知らせ 新・家族教室のお知らせ	7
アパリからのお知らせ	8



## シンポジウム「フィリピン貧困層の薬物依存者支援と今後の展望」

シンポジスト： リッチー・クリストバル氏（フィリピンFWC代表）、横地環氏（保護観察官）

島田尚武氏（アパリ理事）、近藤恒夫（アパリ理事長）

コーディネーター： 尾田真言（アパリ事務局長）

尾田）私たちは3年前からJICAの支援を頂いて、前半の部分で見ていただいたような、活動を始めてきたところですが、実はこのプロジェクトが始まるきっかけとなったのは、横地さんからこの話を持ってきていただいたということがありますので、話を持ってきていただいた経緯、そして今でもフィリピンとかかわりを持っていらっしゃる横地さんの活動について話していただきたいと思えます。次にリッチーさんから、現地コーディネータとして話して頂き、島田さんから、アパリとダルクがフィリピンで活動している意義、どうして私たちがこのような活動をすることに意義があるのか、これからどうあるべきなのか、提言を頂きたいと思えます。最後に近藤さんにみなさんの話をまとめていただいたあと、もう一度皆さんから一言ずつ頂きたいと思えます。

横地）さいたま保護観察所の保護観察官の横地環と申します。本日は13周年フォーラムと言うことで、私、毎年フォーラムやっていると思っていて、ダルクと混同していたのですが、13年の節目の初めてのフォーラムを、今回の活動報告会とあわせてやられるという事で大変素晴らしいと思えます。縁があって、私がこのプロジェクトをできるきっかけを作ったという事になるのですが、そのプロジェクトが前半のように立派に成長してきて、みなさんも熱意があって、JICAがひいても続けてやっていこうという発言があり、大変うれしくお祝いしたい気持ちです。

私は2003年～2005年までの間、国連アジア極東犯罪防止研修所（UNAFEI）という所で教官をしていました。最大の仕事はフィリピンに日本の保護司に似たボランティアがいるのですが、それがうまくいってなかったんで、再活性化を始めたのですが、フィリピンのコミュニティに合った、持続可能なボランティアをどう進めていくかが私に与えられた課題でした。その仕事の関係でJICAのプロジェクトに関わっていました。2004年6月にフィリピンで全国保護観察官連盟があり、職業組合ではないのですが、全国の保護観察官が集まってスポーツしたりダンスしたりそういう楽しい集まりが2年に一度あり、ミンダナオ島のカガヤンデオロ市という所で開かれました。私はフィリピンの保護観察官の親玉である保護局と一緒に仕事をしていたのですが、ボランティアの活性化について、日本から講師として来て下さいという事で、初めてカガヤンデオロ市に行きました。

その際、空いた時間に見学がしたいか聞かれたので、「したい」と答えて、その時に、マリキナの檻のついたリハビリテーションセンター、「ドラッグリハビリテーションセンター」と名前は付いていますが、刑務所のような場所、そこに行きました。そこで出会ったのが、センターからすぐに社会復帰するのは難しいから中間施設がほしい、日本で言うと更生保護施設のようなものだと思うのですが、そういったものが必要だとして、自分たちの私財を投じて、「コクーン」という財団をやっている人たちでした。3人のスタッフがいて、1人はリカバリングアディクトのイグナシオさん、一人はカトリック教会のシスター・グレイスカブレラという女性で、お金の計算や経営などを担当していて、もう一人はドクター・サルダリアガ。ドック・ジジという愛称で呼ばれていて、リッチーさんもお存じの方のようですが、リハビリテーションセンターの所長もしているが、自分の娘がアディクトだったらしく、一気に社会復帰するのではなく、緩やかな回復施設が必要だとして自分たちで「コクーン」をやっていました。

しかし、財政難で「日本から来たんですね。日本はお金があるでしょう」「UNAFEIは援助してくれないかしら。無理なら、日本で同じようにリカバリングアディクトを助けている施設に連絡を

取って助けてもらえないか」とその時言われたんです。3人とも、NYに本部のあるデイトップという治療共同体でトレーナーとしての研修は積んでいて、その治療共同体のモデルをフィリピンでやろうという実践家でもあったんです。その後、縁があって私も2010年にデイトップに行く事になりました。

自分のプロジェクトとしてフィリピンの保護司の活性化をやっていたので、JICAに友人がいました。その友人が入れ知恵をしてくれて、「大きなプロジェクトを狙うのではなく、草の根技術協力という、3年間で1千万円までの資金援助が受けられるスキームがあるから、それはどうか?」と教えてくれました。日本に帰ってきて、2004年の7月15日だったんですが、アパリにお伺いして、近藤さんにこの話を持ってきてもらいました。それが発端になって今のマニラの支援活動に繋がっているという事です。

今年の2月1日、保護司の活性化のプロジェクトのフォローアップで現地に行っていました。JICAのプロジェクトが終わっても活動を続けるにはどうすればよいか、保護司の活性化のプロジェクトは、今まさにその段階にあって、2010年にプロジェクトは終わったけれど、何年もの間日本との間で交流は続いていて、これを何とか続けられないかと思っていて、さいたま保護観察所で海外に行ってみようというグループが見つかったので、一緒に行きましょうと言って、2011年1月にまず行き、今回は2012年1月から2月にかけて行ってきました。その際、みなさんが日本に帰国されて、1日日程を空けて、アパリの尾田事務局長をお願いして、タタロンを見せて下さいと、タタロンラーニングセンターに行きました。そこは託児所を基本にして図書館などが併設しているコミュニティセンターですが、写真で同じ着物を着ている人がたくさんいるのが、そのセンターの職員。それ以外の後ろにいる3人は、タタロンでARMに参加している3人だと話してくれました。次の写真で黒いTシャツを着ている人がレナートさん。この地域に住んでいて、NAの中心メンバーで、ARMもやっているよ、と。その時私が聞いたのは、ファミリーウェルネスセンターは2011年までは入っていたのだけれどなくなって、今は地元のNAとしてミーティングをしていると。毎月定期的に1回90分、この3人含めて10人くらいが毎回参加している。男性も女性もいて、17歳以上。この国では18歳からが大人なので、いわゆる青年期または成人が対象となっている。

タタロンは不法占拠者が集まって出来た地域で、ぼろぼろのごみを持ち寄って勝手に住み始めたという町なので、最初はすごい貧困地域だったようなんですが、タタロンの中の第7地区に3万9千人の住民がいて、その人たちがうまくまとまっている。付き添いの保護観察官は、「エンパワードコミュニティ」と言っていました。非常に活性化したうまく手の届いたコミュニティ、貧しいけれど、不衛生だったり恐ろしい感じはしない。コミュニティへの帰属感があって、当事者の特別な活動というよりは、このコミュニティの中でみんなで幸せになるために頑張っていこうという取り組みの一つとして捉えられているので、どちらかというと、コミュニティが先で、薬物の当事者は少しあとになってやっているように見えました。今後の展望としては、薬物からの回復の援助なのか、貧困層の援助なのか、この二つがベースで重なり合うような活動だと思います。どちらを中心にこれからうまく組み合わせてやっていくかが、これから真価の問われる事ではないかと思われま。午前中の発表にもありましたが、本当の最低線の貧困層と言うのは戸籍もない、どこに行くかもわからないという事で、この方達に定期的な援助と言うのは難しい。





どこにターゲットを置くかということと、私たちがやりたい事と、向こうがやってほしいと掲げている事がどこまで一致するのかという問題もあります。これは支援者の側が、いつも訊く耳をもって、チューニングを合わせて、意思疎通を図って、ニーズを掘り起こしていかなければならないのではないかと思います。これは誰もやったことのない新しい取り組みです。日本のダルクにとってもそうだと思います。そういう新しいものを作り上げていくのは、作りあげる本人たちにとっても凄くいいことだと思います。皆さんが誇りを持ってやっていける事だと思いますし、援助を受ける方にとっても意味のある事だと思います。このプロジェクトがどんな方向に向かうか、遠くからではありますが、私も自分で協力できるところは協力していきたいと思っています。充実と発展を祈っています。有難うございました。

リッチー) こんにちは。アパリ13周年ということで、お祝い申し上げます。今回は招待いただき、とても光栄に思っています。また、アパリの皆さんが私の国の支援に強い関心を抱いてくれている事も光栄で、今回こういう形でお会いできることもうれしく思っています。

近藤さんとお会いしたのは、1999年LAでのNAコンファレンスだったと思います。その後お会いしておりませんでした。お互いの事を考えたり、同じ思いを抱いていたのではないかと思います。2007年にふたたび近藤さんとお会いした時、近藤さんはこのプロジェクトのパートナーを探していました。まさに我々は同じ夢を抱いていたのだと感じています。

現在、FWCもアパリも共通の使命を持って取り組んでいると思います。それは、回復のメッセージを薬物依存に苦しむ貧しい人々に伝えるという事です。このプロジェクトはユニークです。なぜなら、フィリピンでは裕福な人間だけが得ている回復のメッセージを、貧困層にも伝えることができるからです。我々の国では、テレビ番組も、政治家も教会も教師も司法機関も、薬物の問題について議論を重ねています。しかし、当事者はそれについて語りません。だからこそ、彼らの考えている事に耳を傾ける必要があると思っています。私はこのプロジェクトのマネージャーとなっていますが、FWCの代表でもありますし、アルコールと薬物のアディクトでもあり、回復者でもあります。だからこそ、依存症者の思いが分かるのです。

ここでフィリピンのドラッグの状況についてお話しますと、1999年の危険薬物委員会の調査では、340万人のユーザーがおり、ソーシャルウェルネスサービスの調査では、2001年、220万~930万人の利用者がいると推定されています。2004~5年の危険薬物委員会の調査では、670万人の利用者がいると見られ、2008年発表のフィリピンの国及び自治体の警察の統計では、90万~190万人とされています。最も高い数値は、2001年の数値ですが、これはメタンフェタミン、通称「シャブ」がフィリピンで大流行した影響だと思います。しかし、司法機関が密売人などを厳しく取り締まった結果、メタンフェタミン・シャブの売上の明らかな減少がみられています。しかし、一方でアルコールやマリファナの問題は増加しています。

政府や政治家による薬物依存からの回復のサポートや、アディクションは病気であるという認識が広まっているにも関わらず、治療や回復の為に効果的なプログラムを提供している民間の施設には、多くの依存症者は繋がっていません。政府や民間の施設は45か所が認可を受けていますが、1万人しか受け入れる事が出来ず、その数字は現実にいるアディクトの数と比べるととても少ない。

これらの事から分かるように、助けを求める貧しい依存症者の為に、我々是非政府組織(民間団体)からのサポートを本当に必要としています。私はアディクトは1対1の取り組み、身体の中からも外からも正気になる事が必要だと思います。その為には、生物学的な、心理学的な取り組みだけではなく、アディクトたちの失望や悲しみ、苦しみを埋め合わせていく事を考える必要もあり、だからこそ家族も含めて感情面でもサポートすべきだし、彼らの精神的な、スピリチュアルな(霊的な)傷も癒していかななくてはならないと言えます。



これが、FWCやアパリがこのプロジェクトを続ける意味・使命だと思っています。アパリとFWCのプロジェクトは2009年5月に始まり、3つのミーティングが3つのコミュニティで開かれました。

1つは先ほどのマリキナのトリートメントセンター、ここは残念ながら終わることになっていますが、10人ほどの参加者がいました。貧困地域であるタタロンではよくオーガナイズされていて、毎回9人から12人がミーティングに参加していました。ついにNAも始まる事になり、毎週土曜日に開催しています。3つ目はマカティ市でMADAC(マカティ薬物乱用防止委員会)で行われていますが、マカティ市とロータリークラブとの共同運営で、政府のリハビリ施設から出てきたばかりの15人~20人が参加しています。

このプロジェクトを維持していく為に我々に何が必要か、我々は何をすべきか、お話しさせて下さい。

このプロジェクトは、貧困層のアディクト達がどうやって健康的な生活スタイルを得て、断薬を続けられるかを考えています。おそらくその為には、彼らが生産的になるということ、彼らの暮らし自体を変えていく事、自尊心を高める事、収入を得て家族を養う事についての動機づけが関係してくるのだと思います。実際に私がタタロンのミーティングで出会った参加者は、ミーティングには勿論来てくれるが、常にお金が無い事に対する不満や苦しみを口にしています。彼らの多くは仕事もなく、1日中家にいて何もせずに過ごしていて、その状況では、お酒を飲もう、薬を使おうという気持ちが再び芽生えてくるのも不思議ではありません。こういった人々にはお金を稼ぐ手段、仕事が必要で、そういったサポートも今後は必要だと考えています。

次に重要なのは、そのコミュニティをよく知る「キーパーソン」の存在です。我々は富裕層であり、貧困層の状況が分からない中で行くので、共に動いていくキーパーソンが必要となっていくでしょう。3番目に、日本側のパートナーの存在がもっと見えてくる事が重要だと思います。これは単なるローカルな組織の活動ではなく、国際的なものであると周囲に伝える事が出来れば、リカバリーミーティングを作ったという事だけでなく、より多面的な活動に繋がる可能性もありますし、お互いにとってより興味深い、参加する動機にあふれた魅力的なプロジェクトになっていくのだと思います。

最後にはもちろん、資金面でのサポートの充実も常に重要です。私や近藤さんがより多くの資金を費やすかもしれないという理由だけではありません。より創造的な、生産的な活動が求められていますし、その活動がプロジェクトを多くの人にとって意義のある、持続可能なものにすると考えます。

次回、もしJICAがサポートの継続をして下さるのであれば、とても大切な事として二つ挙げたいと思います。

一つは、横地さんがおっしゃったように、コミュニティではJICAのプロジェクトだと聞くと、お金持ちがお金を持ってやってきた、とみなす事があります。実際に、タタロンのミーティングでは食べ物配る事もありました。決して悪い事ではありませんが、ミーティングに行くのは食べ物を貰えるからだ、ということも起こりうるでしょう。非難しているわけではありません。彼らは本当に貧しいため、そのサポートも必要としています。多分、貧困層での活動を続けるためには、どのように関わっていくべきなのか、より入念な調査が必要なのでしょう。食べ物を配らないで下さい、と言っているわけではありません。こういったサポートが出来るのか、そのサポートが我々の本当の目的を見えなくしていないか、JICAのプロジェクトだという事がコミュニティにとってどんな意味を持つのか、注意深く見ていく必要があります。特にJICAはマニラでは裕福な団体だ、日本からお金を持ってくる団体だと思われていますから。

一方、マリキナでは、私が市長と個人的に付き合いがあった事が役に立ちましたが、問題は地域の政治家に頼っても、任期が終わるといなくなってしまう点です。新しい人が来ればまた1からやり直しという事になるので、行政と直接やり取りすることの難しさは、マリキナにおいて見えてきました。行政では無い存在、NGOなどの協働を進めていくことも、持続可能性を高める為に重要になります。このプロジェクトで私が考えているのは、「貧困層のアディクトを支援するためにどんなコミットメントが必要か」という事です。



いかに安定的に、安全に彼らを支援できるか、これを考えています。

私は「なぜ近藤さんやアパリがこのプロジェクトをフィリピンで行うと決めたのか」疑問に思っていました。「なぜだろう」と。しかし、横地さんや蜂谷さんのお話などを聞いて、理解しました。「私たちは互いに学び合っているのだ」「私たちは同じ夢を共有しているのだ」と。

今回はこのような機会を与えて下さりありがとうございます。次の機会があれば、今度は日本語で発表したいと思っていますので、皆さん心配しないでください。

島田)日本の政府機関、役所はいろんなところが薬物対応策に携っているわけですね。厚生労働省や法務省や警察と。さっきのダルクの近藤さんの話を聞いて面白いと思ったのですが、ダルクができて26年、日本の警察も薬物問題には大変大きな関心があって、日本民族を守るためには、薬物が民族を破壊するようになってはいかんという気持ちできている。しかし日本の警察庁に薬物対策課が出来たのがちょうどダルクができた25年くらい前ですね。それまでなかったのがおかしい気もするけれど。実は私が警察庁の初代の薬物対策課長でありました。今日こうしてこういう席にいるのも縁だなと思います。



その後私はJICAで監事という仕事をしました。ODA(政府開発援助)で税金の無駄使いがないように、本当に有意義なODAが行われているということを監視して国会やマスコミに報告書を出して監督をしているという任務を負いました。

私はこのプロジェクトの主人公は現在進行中のアディクトだと思えます。PDM(プロジェクト・デザイン・マトリックス)的に申し上げますと、内容はインプット(投入)、アクティビティ(活動)、アウトプット(産出物)、アウトカム(成果)(1)この4つの因果関係をマトリックスで整理するという整理方法です。

一定のお金や人をインプットする。そしてアクティビティをして、一定のアウトプットで、そしてその結果がアウトカム。学校を作れば子供達の知的レベルが上がるとするのがアウトカム。民間の会社でいえばアウトプットといえば売り上げで、アウトカムというのは利益。このPDM的に言うと、このプロジェクトのアクティビティはアディクトたちがミーティングを行う。すなわち仲間の前で正直に自分と向き合い。自分の薬物に対する欲求と戦いについて語る。この積み上げがこのプロジェクトのアウトプットであり、薬物からクリーンになるのがアウトカムだろうと思います。

日本においても各地のダルクで毎日実行されております。私もいろんな場所でこのミーティングを傍聴させてもらっています。みんななんとか薬物依存から脱出したいとの思いをもって望んでおりますが、周囲からの誘惑から脱落してしまうことも稀ではない。依存性薬物からの脱却というのは大変難しいことでもあります。日本でもこれだけ大変なことなんですから、フィリピンでこのプロジェクトをやることは大変難しい。

視点を変えますが、JICAのODAには、道路や橋のようなハード型のものとエイズ対策のようなソフト型のものがあります。これまで高い評価を得ている。例えばシンガポールにおける交番。生産性向上で1960年代には世界一の国になった。あるいはブータンにおける野菜作り。インドネシアにおける母子手帳。日本の母子手帳は素晴らしいですね。あるいは南米チリにおけるサケ。これは日本の技術援助なんです。あるいはアフリカでの理数系教育。などなどですね。ソフト型の分野においてもしっかりとアウトカムが継続している成功事例は世界にたくさんあります。これらは人づくり援助と呼ばれていますが、ハード型と異なる難しさがあります。

私は世界各地でプロジェクトを監査してきた経験がありますが、今回のフィリピンのプロジェクトはソフト型援助の中でも単に類をみない難しい試みであると考えております。

いろんな報告によりますと、2年余のプロジェクトの実施によってミーティングへの参加人員が延べ300名くらい。別の報告によると継続的参加者が5名。と聞いています。現段階でこれは真のニーズをもった主人公たちがようやく舞台に登場してきたなということだと思います。薬物をやっている苦しんでいて何とかして止めたいというアディクトですね。

今後は主人公たちの生計の問題や居住施設などの環境整備に対する支援を工夫していく。アディクトによるミーティングの主体的継続的实施。アディクトたち自身による主体的なものでなければ日本のダルクでも継続できないのは明らかです。ミーティングの質が向上しないといけない。この質の中には非常に優れたものがある。例えば時間をきちっと守る。いつもきれいに掃除している。このダルクにはひとつの品格を感じる。あるいは参加者自身によって自発的な仲間が入って規模を拡大していく、そういう好循環な運動ですね。こういった居住やミーティングの質の向上。こういったところがPDM的に言うと、今後の課題なのかなと。そうすると日本の援助はいらなくなります。

近藤)最初カガヤンデオロというところのドクター・ジジがやっているコクーンファンデーションの施設を見に行きました。行く前に相当脅かされました。海賊はいるしアルカイダはいるし、テロリストもいるし大変危険なところだと。ところがカガヤンデオロはそういうところではなくて、郊外に行くとドールのパイナップル畑があって、延々と続いている。TCといわれる国営のものが11あると聞いたので、日本より進んでるのではないかと思った。まさかTCが薬物刑務所だとは知らなかった。TCは治療共同体という意味ですから。そこは軍隊的なところで、大きな高い塀はないけれど、寝るときは狭いところにカイコ棚のように重なって寝るようなところ。



日本の刑務所はキレイじゃないですか?整然として静かで、話し声も聞こえず、物音ひとつしない。刑務官の怒鳴り声だけは聞こえてきますけど。コンクリートの靴の音と。そんな中でどちらが正常でどちらが異常かは言いたくないですが、お互いに人間的な扱いは受けてないなと感じました。

日本の刑務所は整然としていますが、問題のある人たちが集まって問題がないというのは相当な無理なことがおきているのだらうと。一方フィリピンのTCは日中は放し飼いだけど、夜は鶏小屋のようなところに重なって寝ています。法務省ではなくて、保健省に移行していますね。少し変わったのかなと。いや変わらない気がします。

私たちが元々計画を立てたことが無い。走ってから考えよう。JICAはそういうわけにはいかないですね。3年間のプロジェクトが終わってそのパソコンはどうするのですか?とやる前からそういう話でしょう?秋葉原で買った方がいいか、フィリピンで買った方がいいか、我々はまだフィリピンにも行ってないのに考えないといけない。この習慣は僕にはないです。

ダルクが始まった26年前に東京ダルク1ヶ所で、8年くらいは動きがなかったのですが、その時にダルクが60~70箇所増殖するとは思っていませんでしたから。計画もないし、明日生き延びられるかどうか、この地域の中でダルクが存続できるかどうか。フィリピンで次に考えていることはこの人たちの生活や交通費やミーティングに出るための日本で言う移送費、そういうお金はどうやって捻出するのか?日本だと生活保護という制度があるけれど。そうするとこの人たちを雇用して、生産性を高めて何かやらないと夢のまた夢という感じがしますね。先日JICAで審査の面接をしたときにあと1回だけで打ち切りにしてほしいとお願いしました。それはダルクが始まったときに、アメリカからロイさんがメリノール宣教会から2年間80万づつ、あとの2年間は40万づつでスタートした。それが池の中にポトンと落としたお金が波紋が広がって少しづつ違うダルクに移行して波紋が広がっていった。

唯一我々の目的、創設者の人たちがいつも言いますが、人間は何て共通点が多いのだらうと。私が持っているモチベーションって何か。どうして人間みんな顔も違うのにどうして共通点が多いのだらうということを見出していく。

[1 アウトカムとは、アウトプット(産出物)によって達成されると見込まれる、または達成された短期的および中期的な効果。]



国家や国や貧乏か金持ちか、顔の色が白いか黒いかそれとは関係なく何て共通点が多いのだろうか。それがアパリの理念でございますので。この理念だけ持ち続けていけば、違いを探すのは簡単ですが、共通の理念として、人間が人間を鏡として一緒に歩いていくという当事者主導のスタイルは私たちの持っている最高のものです。これを生かして日本でやったことと同じことをフィリピンでやっていきたいと思ひます。

横地) 先ほど言えなかったことを言ひます、近藤さんの人間は何て共通点が多いのだろうかというのは心にしみる言葉です。フィリピンは女性の地位が高いです。この活動にもっと女性を多く使ったらいひのではないかと思ひます。

リッチー) 私も1人の回復者として思ふことは。アディクトには何の境もない。お金持ちだろうと男でも女でも若かるうか年をとろうか、肌が白くても黒くても黄色だろうか緑だろうと境目はなくて、誰でもが回復するための権利を持っていると信じている。だからこそアパリとの協働でプロジェクトができるのだと思ひます。そしてこのプロジェクトを通してフィリピンの貧困層のアディクトに対して回復する権利を与えていきたいと思ひています。

島田) 日本のダルクがここまで立派に活動しているのは、近藤さんのパーソナリティーが重要だと思ひます。それ以外に生活保護のシステム。その一方で公益法人とか、自治体や政府の監督の下に法人格がないということ。助成金とか補助金を受けていないこと。アメリカで成功しているレストランのリハビリセンターも一切を拒否して、ミミさんという女性のドクターがやっているようですが、ここは大切なところだと思ひています。先ほどダルクは通報してはいけないという話がありましたが、そういう独立性、

自分たちの頭で考えて進んでいる。これがダルクのすごいところだと思ひます。そういうものを踏まえた上で、フィリピンで生活保護の問題、自主独立の問題、政治家の問題、本当に独立してニーズに応じた形でフィリピン型のものがどうやって作っていきけるか。それを作っていくためには近藤さんのような人材がいないと大変だろうなど。フィリピンでも誰かそういう方が出てくるといいなと願っています。

近藤) 希望のない話ではありません。私たちはまず、国家や自治体を当てにしない。国家があるとすればですよ。私たちが国家に何ができるか? 国家にしてもらうのではなく、いつも私たちが考えるのは、いつも国が何もしてくれない。自分たちがやればいひだけの話です。だから警察をお願いします。この人は刑務所に入れます。全部国家がらみ。地域のエンパワーメントが段々なくなってしまつて、役人だよりになってしまつている。日本がギリシャのようになっていくのではないかという不安があります。国家のお金はできるだけ使わないようにして、アパリも自立して自分の好きなことを好きなようにやればいひのです。もらつとそういうわけにはいかない。どちらをとるか。自由をとるか不自由をとるか。どうか皆さんは国家側ではなくてアパリ側についてください。そしてアパリを育ててください。それはダルクもフィリピンも同じです。何も無いところから育てていく。どうか一緒にやってください。



イグナチオ教会の前にて



懇親会にて 13周年のケーキ



## フィリピンプロジェクト3年間の成果

**成果①**

- 支援が必要なフィリピンの貧困層の現状を理解し、そのためのネットワークが構築される

7つの行政/NGOとネットワークを構築し、合計18回の会合を開催



**成果②**

- コアとなる人材が育成される


コアメンバー5名に本邦研修を実施。メンバーが自律的にARMを開催。全37回、実働人員延べ101人




**成果③**

- 貧困層の地域に薬物依存症の理解とミーティングの必要性が認識される

タタロンで29回 (191人)  
マカティで3回 (88人)  
マリキナで5回 (26人)  
合計37回 (延べ305人)



**成果④**

- ミーティングのテキストが完成し使われるようになる

タガログ語のテキストが完成し、ARMで使用された



3年間の活動の成果として左の から まであります。ARMが3年間で3ヶ所で開かれました。マリキナはなくなったのですが、タタロンは最終的にARMからNAに引き継がれ、定期的で開催されるようになりました。当初はNAの開設までは成果として入っていなかったのですが、NAメンバーのみで自律的に開催されたことで、最も望ましい形になりました。

今後はマカティという大きな都市の警察署内でのARMがメインとなります。3月末で本プロジェクトは一旦終了となりますが、ARMが自律的、継続的に行われることを願っています。



## アウェイクニグハウス 入寮者からのメッセージ

### 「自分らしく生きる道を探して」

隆也

私はオペラ好きの母の影響で、幼少の頃から歌うことや人前で何かをすることが好きでした。学校生活では学級委員や生徒会役員を長く務めていたため、校則や規律は守るべきものと思っていました。

薬物は自分とは一生縁の無いもの、その存在すら悪であると思っていました。

そのような私が最初に出会った薬物は<アルコール>でした。

音大進学と共に上京し一人暮らしを始めたのですが、環境の変化からくる寂しさや同級生の中で味わった挫折感を紛らわすために、気がついたら<アルコール>や<セックス>で現実逃避をする状態になっていました。昼夜が逆転し遊び歩き生活は日増しに乱れ、性的なモラルも低下していきました。その結果大学を中退しH I Vに感染をして体調を崩してしまい、夢を諦めるといふ大きな挫折を味わいました。

それからは<ラッシュ>や<5meo>といった(当時は)脱法ドラッグにはまり、同じようにアルコールやセックスで満たされないものを埋めようとしていました。

しばらくしてパートナーが出来て二人で楽しく薬物とは無縁の生活を送っていたのですが、仕事上の人間関係のトラブルでうつ病になってしまいました。うつ症状が酷く8年近く治療を受け続けたのですが、<自分は必要のない人間だ>、<全てがどうなってもいい>と思い始め、<死んでしまったほうがよい>と考えるようになっていました。

そして知り合った人から楽になるからと<覚せい剤>を勧められました。覚せい剤を使うことで、気分が晴れやる気も出るような感覚にとらわれ、自分でインターネットを利用して覚せい剤を購入するようになり、使用する回数も量も次第に増えていきました。

しかし決して楽になることはなく覚せい剤を使用していることへの罪悪感にとらわれ、幾度も止めようとしたのですが、スリップを繰り返したのち警察に逮捕され、自分の力では覚せい剤を止めることは出来ないと思い、自らの意思で施設に入寮することにしました。

初めての集団生活でもあり、自分はセクシャリティーが<ゲイ>であり、<H I V感染者>でもあることをどのように伝えればよいものかと不安も多かったのですが、藤岡の仲間達は自然と受け入れてくれました。

パートナーを傷つけ離れることになってしまい、家族にも迷惑をかけてしまったと思い悩み、精神的に不安定だった私のそばにいつも一緒に居てくれました。私の課題である人とのかわり方や距離のとり方が上手く出来ずに困り果てた時に、たくさんのアドバイスをくれたのも仲間達でした。そうしてすぐに仲間の存在は自分にとってかけがえの無いものになりました。

12ステップを使って行われる一日3回の<ミーティング>や全員で練習をする琉球太鼓<エイサー>、割り当てられる<役割>も回復をしていく上で全て大切なプログラムです。

自分の話を正直にすることで自分と向き合い、仲間の話を聞く事で多くの気づきを得ています。そのお陰で今では薬物を使わない人生を送りたいと思えるようになりました。これからも日々の生活に12ステップを活かしていきたいと思えます。

エイサーを初めて体感した時の感動は今でも忘れられません。仲間が必死に演舞する姿に涙が止まらない自分がいて、私もいつか一緒に太鼓を叩きたいとその場で言葉にしたくらいでした。そして練習を重ね1月には試験に合格してデビューすることが出来ました。入寮以来の念願だった老人ホームの慰問に行き、多くの入居者の方達とふれあうことでたくさんのパワーをいただきました。

役割では食事当番を任されています。食事が楽しみである仲間達の顔を思い浮かべながら、他の食事当番の仲間と協力をして毎日美味しいものを作る努力をすることは喜びとなっています。

### 書籍のご案内！

アパリ発行  
「Born・Again  
(ボーン・アゲイン)」  
体験談 販売中！

2005年5月に第2版が発売になりました。体験談が13人分収められています。アパリではこの本を拘留所や刑務所にいる人への差し入れ用として使っています。

定価：1,500円  
(会員価格:1,000円)

お申込はメールかファックスで  
FAX：03-5830-1791  
メール：info@apari.jp  
ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上お申込下さい。

10月に行われたソフトボール大会では、球技が苦手な私は声が嘎れるまで応援し、仲間達と一致団結する経験をしました。12月に行われたクリスマス会では、ヘンデルの<ハレルヤコーラス>を合唱しました。音符の音とりから始めて慣れない英語の歌詞に苦労しながら1ヶ月練習をして本番に臨みました。さすがは本番に強い仲間達です。私は仲間達の歌声に包まれて、この瞬間が続いてほしい、生涯忘れないと思うほどの感動を味わいました。

<自分らしく生きる道を探して>

入寮すると決めてからパートナーと最後に会った日に、パートナーから言われた言葉です。仲間達と過ごす日々の中で、人を喜ばせることをしたい、人のためになることをしたいと子どもの頃から考えていたことを思い出しました。自分の出来ることとしてこれから先、ボランティア活動で老人ホームの慰問をして一緒に歌を歌ったり、福祉の仕事に従事していきたいと考えています。

<自分らしく生きる>

この言葉を胸に抱いて、施設に繋げてくれたパートナー、家族に感謝しつつ今日一日を精一杯生きています。

**新・家族教室のお知らせ**

長い間、家族教室を担当していただいた町田政明先生は3月いっぱい終了し、町田先生に代わりまして、志立玲子（精神保健福祉士）が担当することになりました。

今までとは形式を変え、全8回の連続講座を毎月第1月曜日にし、第3月曜日にはアディクション関連講座として周辺領域にかかわる各分野の専門家をお招きし、講演会形式にいたします。こちらの講座はどなたでもご参加いただけます。多くの方にご参加いただければ幸いです。

連続講座の方は、家族のみが参加でき、対象は家族教室に参加するのが初めての方などです。講義に加えてグループワークやロールプレイなど行っていきます。全8回ですが、どこの回からも参加でき、1クール終了しても引き続きご参加いただけます。

今年の4月のみ、アディクション関連講座を2回開催します。

<連続講座スケジュール>

- 第1回 5/7（月） テーマ：薬物依存症によるダメージと回復
- 第2回 6/4（月） テーマ：薬物への欲求と「きっかけ」「危険な状況」への対処について
- 第3回 7/2（月） テーマ：薬物依存症者の心にある2つの考え
- 第4回 8/6（月） テーマ：本人・家族の心の成長-自律心・自尊心を伸ばす関わり
- 第5回 9/3（月） テーマ：気持ちの回復：家族自身の気持ちと本人の気持ちの両方を大事にする
- 第6回 10/1（月） テーマ：子どもの成長を助ける関わりについて
- 第7回 11/5（月） テーマ：薬物問題を持つ人の家族の回復プログラム
- 第8回 12/3（月） テーマ：あなたの環境や状態をいいものに変えよう

<時間> 18：30～20：30

<テキスト> 「栃木ダルク・ファミリー・プログラム（森田展彰作成）」を使用いたします。

どうぞお気軽にご参加ください。  
お待ちしております！！



第10回 薬物依存症者  
回復支援セミナー  
DARS in 沖縄  
「処罰から治療へ、そして真  
の社会参加をめざして～沖縄  
ダルク19年のあゆみ」

日時：2012年3月9日(金)  
14時～16時40分  
10日(土)9時30分～16時45  
分

会場：カルチャーリゾート・  
フェストーネ 研修室B・C  
参加費：3000円+カンパ

主催：龍谷大学矯正・保護総  
合センター

**国際シンポジウム**  
日本版ドラッグ・コートを越えて  
～処罰から治療へ、そして真の  
社会参加をめざして～

日時：2012年3月11日  
(日) 10：00～16：45  
場所：カルチャーリゾート・  
フェストーネ 国際シンポジ  
ウムホール

主催：龍谷大学矯正・保護総  
合センター  
協力：DARS・沖縄ダルク

詳しくはアパリのホーム  
ページに掲載しています。





特定非営利活動法人  
アジア太平洋地域アディクション研究所

**アパリ東京本部**  
〒110-0014  
東京都台東区北上野2-2-2  
電話：03-5830-1790  
FAX：03-5830-1791  
Email：info@apari.jp

**アパリ藤岡研究センター**  
(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)  
〒375-0047  
群馬県藤岡市上日野2594番地  
電話：0274-28-0311  
FAX：0274-28-0313

入寮費：月額¥160,000  
(初月のみ¥175,000)  
\*生活保護の方も可能  
入寮条件：薬物依存症から回復及び自立をしようとしている本人。男性のみ。年齢制限はありません。  
入寮期間：個人により差があるので、話し合いながら決めていきます。



ホームページもご覧ください  
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫  
編集責任者：志立玲子  
平成24年3月1日発行  
定価 1部 100円

### <アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決を受け、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

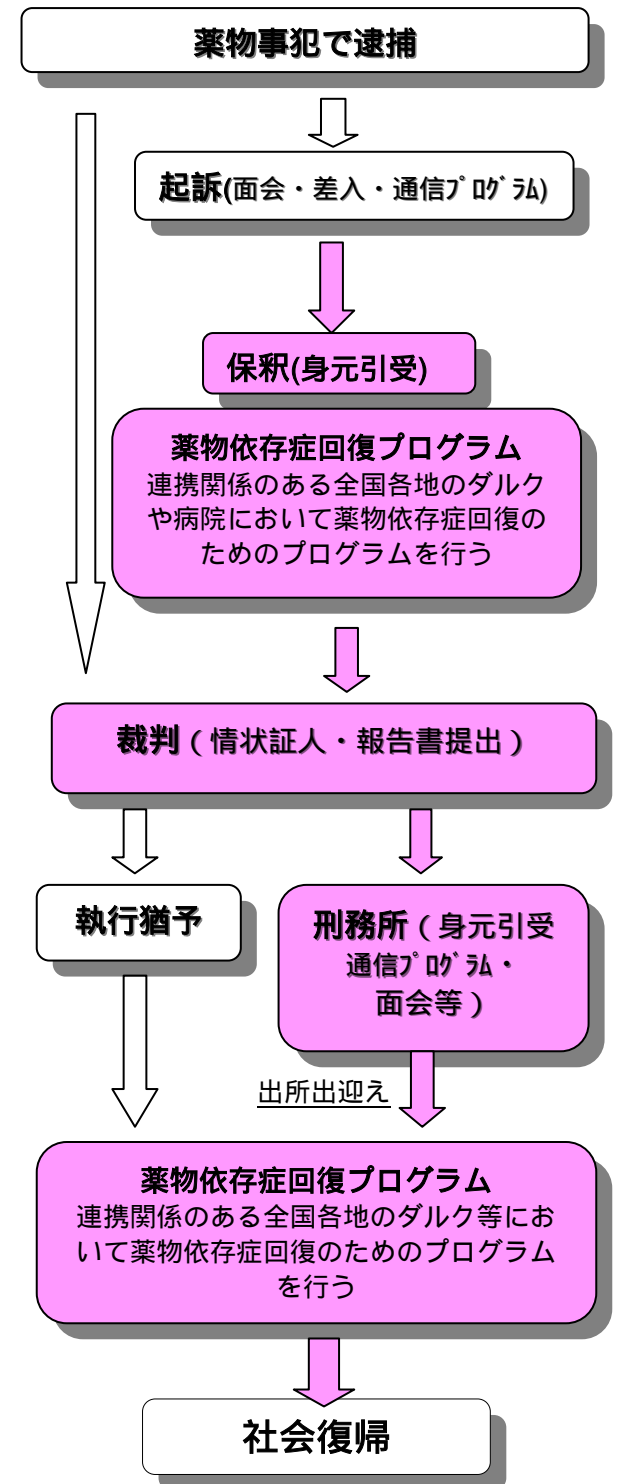
保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本の覚せい剤事犯の再犯率は約60%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は10%以下です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

ギャンブルの問題が原因で逮捕された方の司法サポートも行っています。(窃盗、横領、詐欺等)ご相談ください。

[費用:コーディネート契約料として一律20万円。交通費・宿泊費の実費が別途必要です]

[お問合せは東京本部まで]

### アパリの支援



### <アパリ・家族教室>

日時	テーマ	ファシリテーター
3月5日(月)	罪悪感を責任感に	町田 政明(ホープビル・カウンセラー)
3月19日(月)	今すぐには行動できない自分	町田 政明(ホープビル・カウンセラー)
4月2日(月)	アディクション関連講座1 「ダルク・アパリの今後の展望」	講師・近藤 恒夫
4月16日(月)	アディクション関連講座2 「依存症者に対する出張カウンセリング」	講師・新藤 説子 (Setsuko心理臨床オフィス代表・カウンセラー)
5月7日(月)	連続講座 第1回 「薬物依存症によるダメージと回復」	志立 玲子(精神保健福祉士)

[対象]

連続講座(全8回)はどの回からも参加でき、家族のみが参加可能です。見学はお断りしています。  
アディクション関連講座はどなたでも参加できます。

[日時] 第1・第3月曜日 18:30~20:30

[場所] アパリ・クリニック上野2階 【参加費】3,000円 (2名の場合は4,000円になります)

[予約] 不要です

**本年より家族教室は祝祭日お休みいたします。**